

互いの観察や教え合いにより、課題解決をすることで、思考力・判断力・表現力を高める子ども

— 中学2年「走り高跳び」の実践から —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本単元は、2年2組の男子17名、女子18名、計35名で取り組んでいく。このクラスの生徒は、何に対しても真面目に取り組み、自分を高めようとする姿が見られる。体育の授業に苦手意識のある生徒は少なく、このクラスの生徒の多くは体を動かすことに積極的で、意欲的に授業に取り組もうとする姿が見られた。また、本単元に入る前に生徒にアンケート調査を実施したところ、体育分野については半数以上（男子12名、女子10名）の生徒が「好き」と答えているが、「走り高跳びは好きですか」という質問には、「好き」と答えた生徒が11名（男子6名、女子5名）、「嫌い」と答えた生徒が、8名（男子3名、女子5名）、「どちらでもない」と答えた生徒が、16名（男子8名、女子8名）であった。走り高跳びが「嫌い」な理由には、「高く跳べないから」や「恐怖心があるから」という意見が挙げられた。また、「どちらでもない」と答えた生徒の理由には、「あまり得意じゃないから」や「嫌いではないが、あまり良い記録が出ない」、「どのようにやればいいのか分からないから」という意見が挙げられた。このことから、大半の生徒は走り高跳びに対して少なからず不安感を持っていると言える。また、生徒はよりよい記録を出したい、少しでもできるようになりたいという気持ちをもっていることから、一人ひとりができるようになるための自分の課題をもち、その課題を解決していくことによって、運動する楽しさやできた喜びを味わうことができる。そのことが、次の課題や他の運動への挑戦する意欲につながるだろう。ただ一人で、課題を発見し解決していくことは、心身ともに困難である。共に学習する友だちどうしで、互いにアドバイスしたり励ましたりすることによって容易となる。

他と共に課題解決することによって、「嫌い」「どちらでもない」と答えた生徒が少しでも運動する楽しさや喜びを味わい、次へチャレンジできるようにしていきたいと考える。

(2) 本単元の目標や内容と体育・保健体育科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

体育・保健体育科では、思考力・判断力・表現力を「既習の基本的な知識・技能をもとに自分自身や他者の課題を発見し、適切な解決方法を選択し、考え、さらに実践することができる」と定義した。

陸上競技は、どの種目においても記録に挑戦したり、相手と競争したりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。本単元の走り高跳びでは、リズムカルな助走から力強く踏み切り、より高いバーを越えたり、仲間と競争したりすることができるようになるために、ペアでの観察や教え合いで、自分や仲間の課題を発見し、その課題解決の方法を考え、自己の記録の向上につなげていくことをねらいとする。また、その中で走り高跳びの楽しさや喜びを味わえるようにする。

そのためには、基本的な動きや効率のよい動きを身につけることができるようにすることや、ルールやマナーを守り、分担した役割をはたすことに意欲をもち、安全に気を配るとともに、課題に応じた運動の取り組み方を工夫することが大切である。本単元を構成するにあたっては以下の点に留意した。

①走り高跳びの特性を理解し、技能の定着を図る。

生徒のアンケート調査より、「どのようにやればいいのか分からない」とあることから、走り高跳びの基本的な動きや練習の方法をしっかり身につけられるようにする。そうすることで、「なぜ跳べたのか」、「なぜ跳べなかったのか」という理由を、今までの理解をもとに考えることができる。そして、自分自身の課題や仲間の課題を見つけ、解決方法を選択し、考え、実践することによって、思考力・判断力を高めることが期待できる。

②ペアやグループでの活動や話し合いの場面を設定する。

ペアの観察により気づいた点や、改善点を学習ノートを用いて互いにアドバイスをし合い、自分の意見を伝え合うことで表現力が養われると考える。さらに、ペアやグループでの意見を学級全体へ投げか

け、共有する場面を設定する。ペアだけでなく、より多くの人の考えに触れることで、さらに自分の考えが深まり、新たな学びにつながっていく。

このように、思考力・判断力・表現力の育成には、①と②を土台として学級全体で共有することが重要であると考えます。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

中等部では、今まで身につけた知識・理解をもとにして、自分や仲間の課題やその解決方法を考え、その思いや考えを伝えることでお互いの力を高めていくことを思考力・判断力・表現力と考える。そのためには、ペアやグループでの活動や、話し合いをもとにしながら、その思いや考えを学級（集団）全体へ投げかけ、共有して解決していくような課題の設定が必要である。本単元では、はさみ跳びに取り組んで、「高く跳ぶ」という走り高跳びの特性に触れ、より高く跳ぶために、技能を身につけるためのコツを意識した練習に取り組み、ペアやグループでの観察や教え合いの場面を学習活動に取り入れていく。

子どもの実態として、子どもたちが走り高跳びで嬉しいと感じるのは「高く跳ぶ」という走り高跳びの特性に触れたときで、逆に不安を感じるのは「バーに当たると痛そう」など恐怖心や特性に触れられなかったときが挙げられる。そこで本単元では、バーの代わりにゴムを使用することで、子どもたちが不安なく積極的に活動できるような手だてをとっていくようにする。また、リズムカルな助走から力強く踏み切って大きな動作で跳ぶための、課題を見つけやすくするために、走り高跳びの運動のポイントを「助走」「踏み切り」「空間動作」「着地」の4つの局面に分け学習に取り組んでいく。そうすることで、課題を見つけるための観察の視点を絞り、お互いの考えに思いを巡らせやすくする。また、助走であれば、「ラスト3歩で加速する」など伝えるポイントを短く、わかりやすく提示することで短時間で意見の共有を進めるような場面設定の工夫も必要となる。練習に取り組む中で、ペアだけでなくより多くの人の考えに触れさせ、これまでの自分自身の思いや考え、知識と比較することで思考をゆさぶり、新しい考えを実感できるようにしていきたい。また、学級（集団）全体へ投げかけ、全体で共有し自分自身の課題の解決方法を考え、実践することで思考力・判断力・表現力を身につけることができるようにしていきたい。

思考力・判断力・表現力の評価は「運動や健康・安全についての思考・判断」の観点の評価規準によって行う。単元を通して、子どもたちが運動のポイントに気づき、その動きを身につけられるように、ペア学習シートを用いて互いの試技の観察により気づいた点や改善点をみつけることができ、それをどのよう生かしているかを評価していく。また、体育ノートへのふりかえりや、具体的な動き、ペアやグループ内での仲間への言葉かけや生徒の変容をとらえ、評価していく。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	オリエンテーション ・単元計画の確認 ・走り高跳びのルールの確認	1	・単元計画を知り、活動の見通しをもつ。 ・走り高跳びの基本的なルールについて理解する。 ・50m走のタイムをもとに目標記録を計算する。
2	試しの計測 ・本時のルールを理解し、記録に挑戦	2	・ルールの確認 ・現時点の自分の記録を知る。
3	課題に応じた運動の取り組み ・基本的な動きの練習 ・ペア学習	3 4 5	・高く跳ぶために必要な技能ポイントをペアやグループで考えながら練習に取り組む。 ◇ペアやグループで見つけた互いの課題について発表することで学級全体で共有し、自分の考えやアドバイスをもとに自己の課題を発見し、課題解決のための方法をみつけることができる。

4	単元のまとめ ・まとめの記録会	6	・本時のルールを確認して、まとめの記録会をし、自分の記録を確認する。
5	単元のふりかえり	7	・自分のこれまでの取り組みをふりかえり、課題の達成度や技能の伸びを確認する。

3 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

単元構成において設定した学び合いの場面において、自己の気づきや課題の設定、ペアでの観察や互いのアドバイスのふりかえりの記述を分析し、生徒の思考力・判断力・表現力が高まったかどうかをとらえることとした。

そこで、以下のような評価計画を作成した。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
3	3 4 5	ペアでお互いの試技を観察し合い、互いの課題や、改善点を見つけ、自己の課題を発見し、課題解決のための考えを深める。	観察する中で、友達の課題や改善点を見つけ、また友達の意見から自己の課題を発見し、課題解決の方法を選択している。	ペア学習シート 発言 ふりかえり	友達の課題や改善点を具体的に見つけ説明し、友達の意見によって自己の課題の適切な解決方法を選択し、実践しようとしている。	友達の課題や改善点を見つけ説明し、友達の意見によって自己の課題の解決方法を選択している。	友達の課題や改善点を見つけることができず、友達の意見による自己の課題の解決方法を受け入れている。

4 授業の実際

(1) ペアで課題をみつけ、解決する方法を考える

本単元では段階的に2つに分け、意識するポイントを絞りをやすくした。3次の学習では、助走のときに歩数が合わなかったり、スピードに乗りすぎたり、スピードが乗らず、助走を生かした踏み切りがでななかったりする場面があることから、「リズムカルな助走」の運動のこつをつかむために、ハードル同士をゴムでつなぎ、5～7歩の助走を練習し、自分に合った歩数を見つけるためにペアで観察した。

今日は、友達に見てもらって、お互いアドバイスし合うと改善点を見つけることができたりやすかったです。友達からの改善点に、最初は軽めで走り、最後の3歩を力強く走った方がいいと書いてくれたので、次の体育ではこの助走のポイントを意識して改善していきたいです。また、良いと言われたところは、これからも伸ばしていきたいです。 (生徒A)

上のふりかえりにもあるように、友達からの観察で「リズムカルな助走」を、「最初は軽めで走り、最後の3歩を力強く走った方がいい」と表現している。意識としてスピードよりもリズムを重視し、最後の3歩を加速することで踏み切りに移りやすい助走となることから、意識するポイントを理解し表現している。また、どんなことに気をつけたらいいのか、自己の意識するポイントが明確になったことで課題解決に意欲が見えたので、次の時間の見通しをもつことができている。ペアでの関わり合いの中からお互いのよかったところを認め合うことで技能の上達が見られた。

4時間目の「踏み切り～空間動作(振り上げ足・抜き足)からの安全な着地」では、踏み切りの時、足裏全体で強く地面を押すようにキックし、上体を起こし空間動作に移ることに視点をいった。空間動作では、振り上げ足と抜き足の動きに項目を分けペアで観察を行った。

そして、走り高跳びの「助走」「踏み切り」「空間動作」「着地」の4つの局面の基本的な動きや運動のポイントを踏まえた上で、助走から着地までの一連の流れの中でペアでの観察を行った。

4つのポイントを意識しながら跳ぶことができよかったです。自分でも気づいていた課題もあったけど、新しい課題も見つかりました。それは振り上げ足です。抜き足は高く上げられるのですが、振り上げ足がどうしても下がり、引っかけりそうになります。友だちからは、あまり腕が上がってないので、もっと勢い良く腕を上げると振り上げ足が上がって高く跳べるよとアドバイスをもらいました。すると、ぎりぎりまで跳んでいた高さも余裕をもって跳べるようになり、楽しくなりました。
(生徒B)

生徒Bは、自分で課題をみつけることができる生徒である。しかし、なかなか記録が伸びないでいた。振り上げ足に課題があり、どうしても引っかけりそうになるというものだった。友だちに、腕の使い方についてアドバイスをもらい、より高く跳べるようになった。生徒Bも、ペアと課題や解決方法をみつけることによって、技能的に向上し、楽しさを味わうことができた。

(2) ペアで見つけた解決方法を全体が共有し、試したり応用したりする

資料1

ペアでの観察の際、自分の考えを言葉や身振りなどで表現したり、お互いに良かったところや気づいたことをその場でアドバイスし合ったりするペアの姿も見られた。生徒の体育ノートで、踏み切りの際に振り上げ足が思い切り振り上げることができない生徒に対し、ペアの人から腕の振り上げについてのアドバイスがあった。そこで、次の授業のはじめに、ペアの観察で振り上げ足を思い切り振り上げるために、腕の振り上げのことがアドバイスに挙げたことを全体で紹介した。すると、これ



まで無意識にやっていたことも、運動のポイントとして意識することで、試技をする順番を待っている間などに大きく腕を振って跳ぶイメージを練習する姿が見られた。このように、子どもの気づきや何気ない一言をクラス全体に教師が投げかけることで、共有する場面をもうけ、自分や仲間の追求のよさを感じながら学びを進めていけるように価値づけたりすることで、よい動きのイメージをもたせるように支援した。その他にも、友達の練習を見て、「こうすればいいのか!」、「もっとこうすればいいのに。」など自分に置き換えて考え、今後の授業に向けての意欲的な目標を書く生徒も見られた。生徒の体育ノートや生徒同士の発言から、それぞれの運動のポイントを理解し、ペアでお互いの課題についてアドバイスをすることで自分自身の走り高跳びの知識が深まったと言える。個人の課題が明確になった上で、新しい考えを実感できるように学級(集団)全体へ投げかけ、全体で共有し自分自身の課題の解決方法を多面的に考え、より学びを深める場面を設定した。資料1はペアでの観察により挙げた課題を小グループに分かれ、自己の課題の改善点をホワイトボードに書き出している様子である。学び合いのなかで、同じ課題を持っている仲間がいることを知り、その改善点を共有することで、自分自身の課題解決の新たな気づきが生まれることに期待した。

(3) 学級全体で教師のはたらきかけにより、よりよい解決方法、考え、試し、判断する

以下は、ペア学習でアドバイスを受けたものの、踏み切り前のラスト3歩を力強く踏み切ることに ついての具体的なイメージがもてず全体へ投げかけた際の教師のはたらきかけの場面である。

T : ホワイトボードに踏み切りでラスト3歩を力強く書いてあるグループが多いけど、具体的にどんな3歩になると思うかちょっとその場でやってみて。

生徒C : こんな感じです。(実演…3歩とも力強い踏み切り)

T : ありがとう。じゃあ、それを音で表現するとどんな音になる?

生徒C : ダン、ダン、ダンですかね。

T : 3歩とも力強く踏み切る感じなんだね。みんなはどう?

生徒D : 高く跳べている人を見ると、3歩ともじゃなくて3歩目を特に強くしているような気がします。

T : なるほど。じゃあ、それを音で表現すると?

生徒D：タ、タ、ターンかな～！？

T：今、2つの跳び方が出たけど、他の跳び方がある人いるかな？

クラス：（黙る）

T：ないようだけど、みんなはこの2つの跳び方のどっちに近いと思う？手を挙げてみて。

クラス：（挙手）生徒C…20人、生徒D…15人

T：Cさんのほうがちょっと多いみたいだね。じゃあ、どっちの跳び方のほうが高く跳べそうかさっき言ってもらった音に意識して実際に跳んでみよう。

クラス：（練習）（練習後もう一度集合する）

T：みんな音の違いに意識して跳べたかな？どっちの音のほうが力強く踏み切れた？

生徒E：タ、タ、ターンのほうが跳びやすかったです。

T：ダン、ダン、ダンの跳び方はどうだった？

生徒E：3歩とも力強くするのを意識すると、歩幅が合わなくなりました。最後の1歩だけに集中した方がやりやすかったです。

T：なるほど。みんなはどっちのほうがやりやすかった？手を挙げてみて。

クラス：（挙手）生徒C…3人、生徒D…32人

生徒の多くが踏み切りのラスト3歩のイメージがつかめないので、「力強く」という言葉について掘り下げることとした。実演して共有化を図ることは難しいため、音で表現するよう提案した。すると、ダン、ダン、ダンという言葉で表現した。そのことによって、イメージできた生徒Dは、3歩目を強調するという違う踏み切りのコツを発表した。これは、「力強く」を掘り下げ、音で表現したことによって共有化が図れ、新たな解決方法がうまれた場面である。その結果、生徒一人ひとりが「踏み切りはダン、ダン、ダンか、タ、タ、ターンか」という視点をもって試すことができた。そこで、リズムカルな助走からの力強い踏み切りの仕方をほぼ全員がみつけることができた。

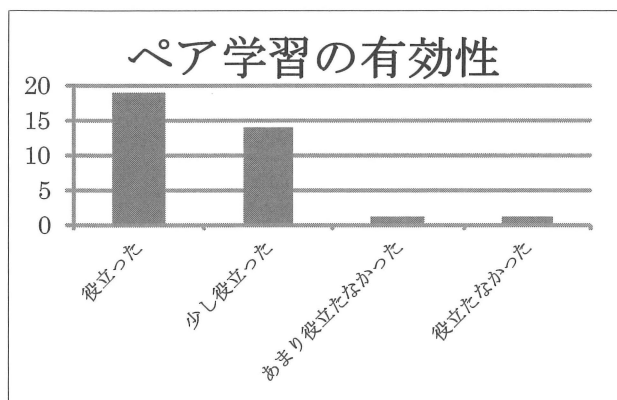
全体での学び合いの場面では、生徒の意見を掘り下げ、踏み切りのイメージを音を使って表現することで、踏み切りのコツが具体化されていくのに大きな役割を果たした。また、違った視点から捉えることにより、踏み切りのコツを意識しながら練習することで新たな気づき生まれ、生徒に学びの変容が見られた。この他にも、同じ課題を持った仲間がいることで一体感が生まれ、課題を克服しようとする意欲が高まったようであった。このことから、全体で共有化をはかることは、意識すべきポイントが知識として定着し、自分の課題を解決していくための方法を考えたり、表現していったりすることに有効だった。よって、全体での学び合いが子どもたちの思考力・判断力・表現力を育成し、一人ひとりの中でよりしっかりしたものとなるための教師のはたらきかけの重要性を再確認した。

(4) ペアや学級全体で課題解決したことをふりかえる

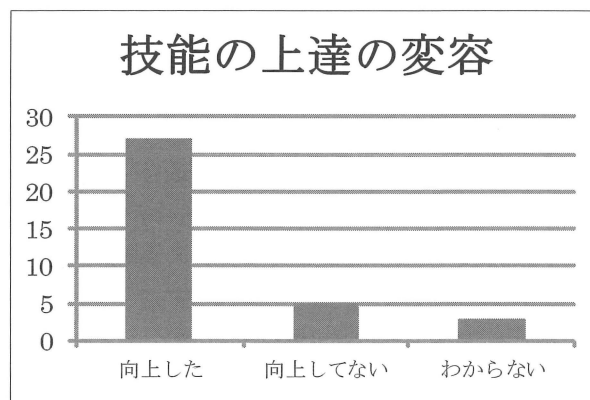
4次では、今までの授業を通して身についたことや、学び合ったことの成果を確かめるために記録会を行った。また、5次で単元のふりかえりを行い、授業の前後の走り高跳びに対するイメージの変化やペア学習の有効性について（資料2）、走り高跳びの技能の上達について（資料3）のアンケートを行った。

その結果、本単元のふりかえりのアンケート結果にもあるように、9割以上の生徒がペア学習は役立ったと答え、走り高跳びの授業によって、約8割の生徒が技能が向上したと答えている。このことから、ペア学習でお互いの試技を観察し合うことで、自分では気づけなかった課題に気づくことができ、そのことが技能向上につながっていったと考えてよいのではないだろうか。自分自身の課題を発見し、課題を解決していくために適切な解決方法を考え、それを実行していくためには、ペアの試技を観察することや、気づきを伝え合うことにより効果が高められていくことがわかった。

資料2



資料3



5 成果と課題

本単元では、思考力・判断力・表現力を育成するために、ペアで走り高跳びの試技を観察し合い、教え合ったり、励まし合ったりすることで自己の課題と課題に対する取り組み方法に気づかせ、自分では気づかない新たな学びが生まれる場面を設定し、授業を進めていくことに重点を置いて取り組んだ。

30人の子どもがお互いの課題をみつけ、解決方法を考え合っていることがわかる。

ここで考えたこと生かしているので、27人もの生徒が技能が上達したとアンケートに答えていると思われる。また、ペア学習の有効性についてもほとんどの生徒が感じていると言える。

できることが増えたことによって次の運動への意欲が高まり、より高い技能修得のための思考力・判断力・表現力へとつながっていったと言える。

ペアの観察の際に学習シートを使用した。はじめは友達の課題を見つけることができなかった生徒や、ペアの改善点を

気づいていても学習シートに記入しない生徒も見られた。しかし、授業を進めるにつれ、ペアとの話し合いが増え、学習シートの改善点やアドバイスを喜ぶ生徒が増えてきた。互いの課題解決に向けて仲間にも助言したりしようとすることは、自己の能力を高めたり、仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動することにつながった。そういった雰囲気の中での学び合いがあったからこそ生徒の技能を高めていくことができたのではないだろうか。

課題として、ペアでお互いの試技を観察する際、観察する側と試技をする側が交代するときにはじめて気づいたことやアドバイスを伝えるペアが多かった。そのため、アドバイスを受けても次の試技まで時間が空いてしまい、アドバイスの効果も薄れてしまった。観察する側がペアの試技を見て、その都度気づいたことやアドバイスを伝えることで、すぐに試技に生かすことができ、意欲や技能の向上につながると思うことから、授業の構成や教師の支援のあり方についてさらに工夫することが今後の課題である。こういった課題を踏まえ、運動の心地よさを味わわせながら、ペア学習の方法や学級全体での共有の仕方を工夫した授業づくりをしていきたい。

(文責 岡田 歩美)

評価基準		
A	B	C
友だちの課題や改善点を具体的に見つけ説明し、友だちの意見によって自己の課題の適切な解決方法を選択し、実践しようとしている。	友だちの課題や改善点を見つけ説明し、友だちの意見によって自己の課題の解決方法を選択している。	友だちの課題や改善点を見つけることができず、友だちの意見による自己の課題の解決方法を受け入れている。
9人	21人	5人